

# 蕨市立病院の移転建替えについて

## 蕨市立病院施設整備の経緯と現在の状況について

### ○蕨市立病院施設の現状

当院の施設は、昭和45年の竣工以来築53年が経過し、耐震性能が不足しているばかりでなく、建物の老朽化が進んでおり、また、電気設備、機械設備、衛生設備等、設備面の劣化も著しい。医療技術の進歩に伴い、病院に求められる社会的要求を満たすような機能向上に施設面で応えられていない状況であり、このままでは医療水準の低下にもつながりかねないため、早急な対応が必要である。

#### <当院の概要>

- ・病床数(機能):一般130床(急性期)
- ・開 設:1952(S27)年8月
- ・建築年:1970(S45)年11月
- ・所在地:蕨市北町2丁目12番18号
- ・構造等:本館:鉄筋コンクリート造 5階建  
サービス棟:鉄筋コンクリート造 2階建  
リハビリ棟:鉄骨造4階建 2001(H13)年3月完成
- ・延床面積:6,865.65㎡
- ・敷地面積:5,645.51㎡(蕨市保健センターを含めると6722.19㎡)

### ○蕨市立病院整備検討委員会での検討

当院では、施設整備について基本方針の検討のため、令和元年に「蕨市立病院整備検討委員会」を設置し、令和5年11月、蕨市立病院の整備は市内別敷地での移転建替えが望ましいという方針案を示した報告書が提出された。

### ○移転建替え方針の決定と現在の状況

移転建替え方針案については、市民説明会の実施や、新たに設置した「蕨市立病院整備検討審議会」での審議を経て、令和6年3月に市で正式決定された。

現在は、整備にあたっての基本的な考え方や新病院に求められる役割と機能、建設の規模、事業費やスケジュールなどについて示す「整備基本構想・基本計画」について、令和6年度中の策定に向けて取り組んでおり、審議会でのご意見を踏まえながら、具体的な検討や整理を行っている。

また、令和7年度からは基本設計に着手予定である。

## 新病院における医療機能(役割)と病床数の検討

### ○医療機能(役割)

今後、当院として担うべき役割は、「高度急性期と地域医療をつなぐための一定の急性期機能」「高齢者増に伴う医療ニーズに対応し、地域包括ケアシステムの一端を担い、【治し、支える医療】を進めることができる回復期機能」の両方であると考えている。

また、少子化が進む社会において、周産期医療及び小児医療を継続し、安心して子育てができる環境づくりを進めることも公立病院としての重要な役割である。

### ○病床数と病床機能

今後の高齢者の医療需要をはじめ、回復期病床の稼働による入院日数増のほか、さいたま市南区からの医療需要が見込まれるという立地特性から、病床数は現在の130床をベースに検討する(※)。

病床機能については、上記「医療機能(役割)」に備えるため、急性期から一部を回復期(地域包括ケア)へと転換する必要があるが、転換病床数については、機能に合わせた全体のバランスの見極めや、必要な医療スタッフの確保という課題があることから、現時点では30床程度を想定し、地域医療の状況に合わせて見直していくこととしたい。

※移転先敷地で建築可能な施設の面積は限られており、設計段階で、病床の個室化や機能の充実といった療養環境向上等の検討に伴い、病床数を削減することは考えられる。

### 【新病院建設における医療機能と病床数の考え方】

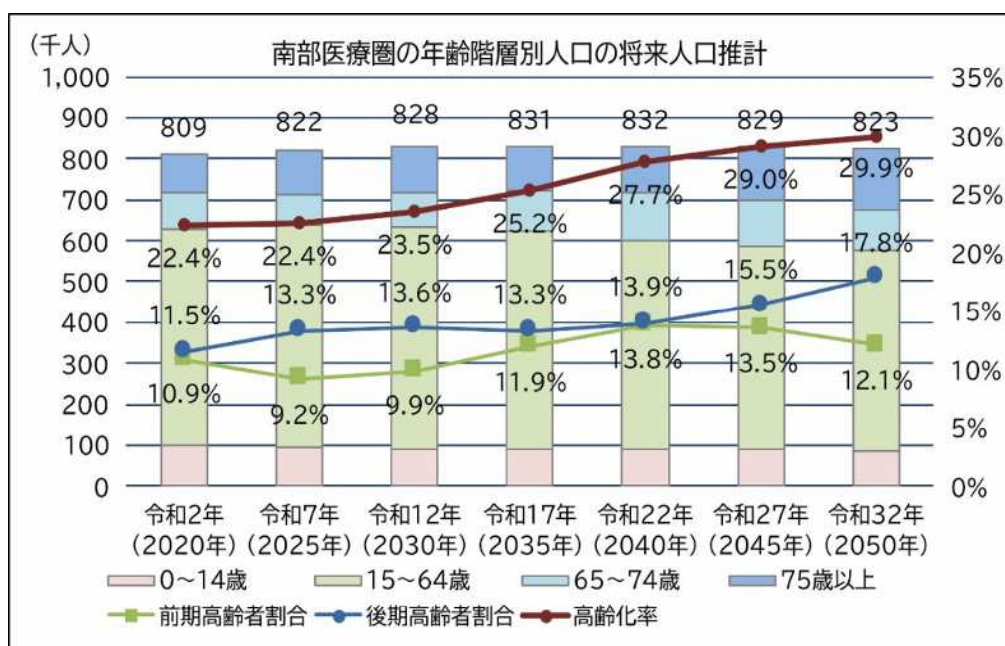
- ・急性期と回復期の機能を兼ね備えた病院
- ・病床数は現行の130床を基本とする
- ・急性期の一部(30床程度)を回復期(地域包括ケア)へ転換

(参考)地域の人口及び医療需要の見込について

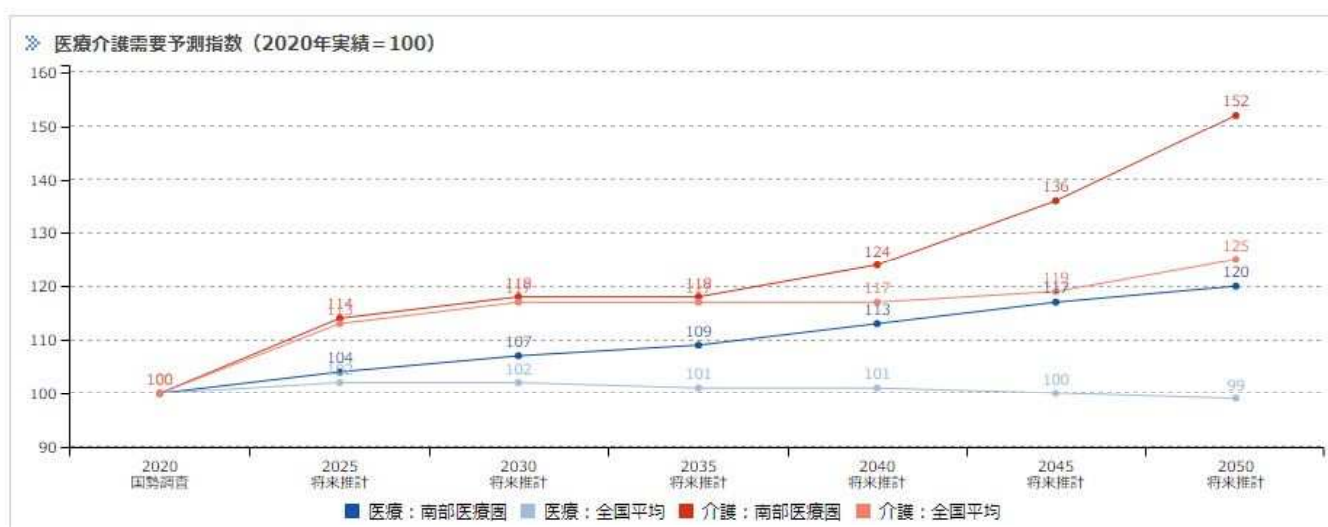
○南部医療圏の人口及び医療需要の見込

南部医療圏の総人口は、2050年まで横ばい～微減であるが、高齢者割合の増により、医療需要は増加する見込みである。

これに伴い、病床機能では、急性期を脱した患者の在宅復帰支援や、施設や家庭からの入院などに対応するため、回復期の必要性がこれまで以上に高まっていくものと思われる。



出典：国立社会保障・人口問題研究所



出典：日本医師会 地域医療情報サイト (<http://jmap.jp/>)